

なが はま こう こう すい そく かん ぶ
長浜高校水族館部！

れい じょう こ き い
令丈ヒロ子／作 紀伊カンナ／絵



講談社 青い鳥文庫

5

部の危機と部長の願い

68

4

今日から先輩

54

3

部活が始まった！

38

2

あこがれの水族館部

20

1

初めてのイベント

5

もくじ

6

ぼくの決心、みんなの気持ち

85

7

史上最低の部長？

102

8

秋を乗りこえる！

118

9

部長はいつでもいそがしい

134

10

クリスマスイベントの夜に

152

あとがき

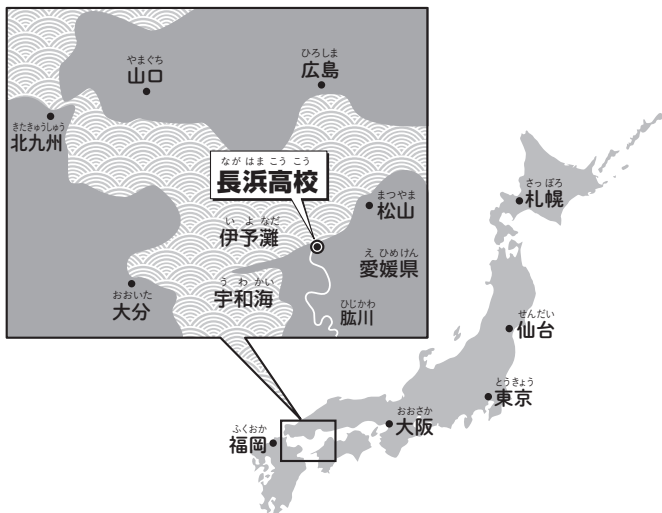
168

文庫版あとがき

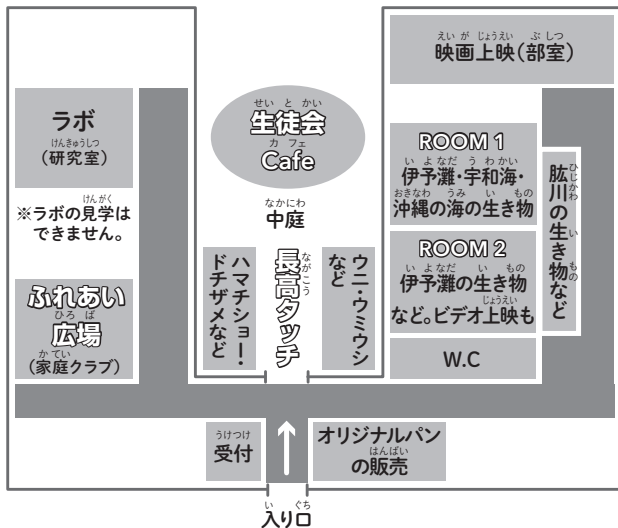
172



なが はま こう こう ば しょ
長浜高校の場所



なが こう すい ぞく かん
長高水族館MAP



1

初めてのイベント

その日、十二月の第三土曜日。

（あー、いよいよ今夜だなあ。）

ぼくは校舎から外に出て、もうすぐ日がしずむ、夜の色に染まりかけた空を見上げた。
（よかった。天気はいいし、そんなに寒くない。きっと今夜のクリスマスイベントは、たくさんお客さんが来るぞ。）

うなずいて校舎のほうをふり返る。

愛媛県立長浜高等学校。それがこの高校の名前。

愛媛県大洲市、肱川と伊予灘の海のすぐそばの、自然豊かな場所にある。

J R 予讃線の伊予長浜駅から海岸に向かって歩いていくと見えてくる、一学年約四十

人、全校の生徒を合わせても百二十人ほどの、こぢんまりした学校だ。

その校舎を囲む塀には、ひととき目立つものがついている。

それは、『ながこう水族館』の大きな看板。オレンジ色のあざやかなカクレクマノミや、サンゴの絵が描いてある。

ぼく、井波あきらは長浜高校二年生、そしてこの『ながこう水族館』を運営している水族館部の部長だ。

水族館部って、なに？ それ部活なの？

初めて聞いた人は、みんなそうきいてくる。

そう、部活。長浜高校水族館部は、高校生が海や川の魚の水族館を運営している、日本でただひとつの部なのだ。

百以上の水槽、百五十種、約二千匹（正確な数はわからないんだけど、それ以上は、絶対にいる！）の海や川の生き物を、二十人ほどの部員で飼育している。

そしてその生き物たちを毎月第三土曜日に、無料で一般公開しているのだ。それがもう、大人気！ 毎月見に来てくれる近所の人もあるし、評判を聞きつけて遠く

からやつてくる人も増えて、今では一日に五百人以上のお客さんが水族館にやつてくる。

きよう
今日はその一般公開日だった。

こうかいじかん
公開時間は午前十一時から午後三時まで。制服の上に特製のそろいのはつぴ（えりに

ながこうすいぞくかん
『長高水族館』と書かれていて、全体にオレンジ色のカクレクマノミがプリントされている！）を着て水族館部員がお出迎え。部員が交代で、お客さんたちに水槽の生き物の説明

をしたり、質問に答えたりする。

なかにわ
中庭にあるタッチプールでは、実際に生き物にさわってもらったり、長高名物のハマチ

の輪くぐりショーを見てもらったりする。

スタート時は水族館部の部員だけで始めた一般公開日だったが、今は部員以外の生徒た

ちも協力して、イベントを盛り上げてくれている。

いっばんこうかいび
一般公開日のお客さんが増えるにつれ、水族館部の部員の手が回らなくなってきたとき

に、

「じゃあ、こちらが小さい子が遊べるようなコーナーを作ろうか？」

と、魚釣りゲームやアイロンビーズコーナーを作ってくれたのは、家庭クラブだった。こ

のコーナーは、小さな子どもたちに大人気だ。

続いて、ビジネスコースの生徒たちが、カメの形のカメラロンパンやタコの形のタコタコクリームパンなど、水族館にちなんだ長高特製パンの企画・販売を始めてくれた。特製パンは学校のお向かいの『まことや』さんというおいしいパン屋さんに作ってもらって、すぐに売り切れてしまう人気商品だ。

さらに生徒会運営のおしゃれなカフェもでき、一般公開日はどんどん充実してきている。今日の公開日もおおぜいの人々がやってきてくれた。

だけど、今夜はさらに特別なことがある。

クリスマスイベントとして、夜にも長高水族館を一般公開するのだ。

そのために部員は一生懸命アイデアを出し合って、今日のために準備してきた。

（そろそろみんな、クリスマスのかざりつけを始めてるころだな。）

昨日のうちにツリーなど、大きなものは用意しているものの、ちゃんと進行しているか、見て回らなくてははいけない。

校舎の中に入ろうとしたら、

「あー！ あきら！ ちよーどいいところに！」

うわ、でつかい声。こえ 友香だ。ともか

校舎の入り口こうしやぐちに立たてた、大きなクリスマスツリーの横よこで手てをふっている。

「ね、ちよつと、ライトをかざりたいんだけど、上うえに手てがとどかないの！ 手伝てつだつてくれない？」

ばんばん！ と、脚立きやたたつをたたいてみせる。

杉沢友香すぎざわともかは同じクラスおなの二年生ねんせい、水族館すいぞくかん部副部長ぶくぶちやう。例れいによつてやる気満々きまんまんだ。そして、副部長ふくぶちやうになつてから、ますます声こえも態度たいども大きくなつてゐる気がする……。

「お、おう。」

ひとかかえもある緑みどりのモミの木きを見上みあげる。

「……なかなかりつぱだな。」

「でしょー！ 重盛先生しげもりせんせいが、もらつてきてくれたんだよ！」

「これにライトをてっぺんまでつけたら、すごくきれいよね。」

友香ともかの横よこで、にこにこしながらツリーを見上みあげているのは、栄夢莉さかえゆりだ。

夢莉も二年生。優しくておとなしい感じに見えるけど、研究班の班長をしている。水族館部は部員全員が、それぞれ担当の水槽があり、責任を持ってその生き物の世話をする。さらに研究班・イベント班・繁殖班と三つある、どこかの班に所属して、班活動をするのだ。

夢莉は研究班のホープであり、クラゲの研究を発表して、日本学生科学賞で入賞している。

じつはぼくも研究班のメンバーなんだけど、いくらがんばっても研究のひらめきや、集中力は、夢莉にはかなわない。

同じく研究班メンバーで、実行力と、押しの強さでは無敵の友香も、夢莉の研究には一目置いている。

「こんな感じでいいかな？」

脚立に乗って、友香の言うとおりに、ツリーの上のほうにライトをのせた。

「もうちよっと、左！」

「あ、行きすぎた感じ。もう少し右かな。」

「今度は下すぎだつて！」

二人にさんざん言われて、やつとライトをツリーにかざりつけることができた。

（ふー、また友香たちにこきつかわれてしまった……。）

ぼくは、こきこきと肩を回しながら、校舎の中に入った。

玄関受付の前に長い水槽。正面には丸い、クラゲ用水槽。青い光に照らされて、クラゲ

がきげんよくふわふわと泳いでいるのを確認する。

ろうかの壁には矢印の形にあらんだ魚の切り絵。小魚の矢印のさすほうに曲がると、

『長高水族館』と貝殻をならべて文字を作った手作りの看板が目飛びこんでくる。

ここから水族館コーナーになる。

大きな水槽が、ずらーとろうかにならんでいる。

まずは『肱川』エリア。地元を流れる肱川にすむ魚たちをメインにした水槽だ。

ハチノジブグの丸い目と、ぱちつと目が合う。

「やあ。」

つい、声をかけてしまう。背中に数字の8の字に似た模様があつて、風船みたいにぷ

くつとふくれたそのすがたは、いつ見てもかわい。ハチノジフグは東南アジア水域とうなんすいいきにて、ひじかわ 肱川の魚ではないが、この展示エリアで人気の魚だ。

（うん、みんな元気だな。水の状態もいいみたいだ。）

部員手描きのイラスト付き生き物ネームプレートや、愛媛の淡水魚についての解説がめくれたりゆがんたりしてないか、さりげなくチェックしていると。

「あきら！　ちよつとそこどいてー！」

直人がイベント班のメンバーを引き連れて、どやどやとやってきた。
脚立や、天井にセツトするライトの束をかかえている。

二年の福森直人が班長をつとめるイベント班は、おもに一般公開日の展示物や、小さい子ども向けのゲームやイベントなどを担当する班だ。

もともとなんでもにぎやかに盛り上げるのが好きなメンバーが集まっているだけに、このクリスマスイベントは、とくにはりきっている。

天井をライトでかざりつけ、天の川みたいにしうとか、校舎の壁にカクレクマノミの映像を映して、プロジェクションマッピング風にしてみうとか、どんどんアイデアを出

してくれた。

「おい、直人^{なおと}。はりきるのはいいけど、そのトナカイの角^{つの}は作業^{さぎょう}のじやまだろ。」

「大丈夫^{だいじょうぶ}だって、あつ！」

言^いつてるそばから、直人^{なおと}がつけていたトナカイのカチューシャがライトのコードにひっかかった。

「……はい、没収^{ぼつしゅう}。」

ぼくはトナカイの角^{つの}カチューシャ、サンタの帽子^{ぼうし}、なぜかハロウィンっぽい魔女^{まじよ}の帽子^{ぼうし}などを、イベント班^{はん}メンバーたちの頭^{あたま}からとっていった。

「没収^{ぼつしゅう}はないだろ。返^{かえ}せよ！」

直人^{なおと}がさげんだ。やれやれ、班長^{はんちやう}がこうだから一年生^{ねんせい}たちもいっしょになって、調子^{ちやうし}に乗^のつてしまうんだよな。

「こういうのに気^きをとられて、だれかが脚立^{きやたたつ}から落^おちてケガするとか、なんか事故^{じこ}があつたら、イベントが中止^{ちゆうし}になるかもなんだぞ。セッティングが終^おわつたら返^{かえ}してやる。」

ぼくが言^いうと、直人^{なおと}がちえつ！ と口^{くち}をとがらせた。

「……わかつたよ。あきららは心配性だからな！」

ほんと、子どもみたいなやつだよ。

（でもまあ、そういう直人だから、今年あんなにたいへんなことに、まっすぐに取り組めたのかもな……。）

秋の一大イベントのことを思い出しかけたそのとき。

「きやーっ！」

女子たちの悲鳴が、ろうかのむこう側からひびいてきた。

水族館のメインにあたる、水槽がたくさんならんでいる部屋だ。

「どうした！」

かかえていた帽子やカチューシャを放り出して、水族館部屋に飛びこむ。

部屋いっぱいに、伊予灘、沖縄、宇和海と、生き物の生息する地域ごとに分けた大きな

水槽がいくつか置いてある。

堂々と貫禄のあるイシダイ、美人ぞろいの熱帯魚、ウツボにウナギにハリセンボン、お

もしろかわいい顔のジョーフィッシュ、それに長高水族館のシンボルでもあるオレンジ色

のカクレクマノミたち。

この部屋で「もしものこと」があつては、多くの生き物の生死にかかわってしまう。
水槽の前で、年生の古谷みおりさんと原口麻央さんがすわりこんでいる。その横には
同じく年生の井上斗真くんが棒立ちになっている。

「どうした！ 大丈夫か!？」

三人とも繁殖班のメンバーなので、どきーん！ とした。

（もしかして、カクレクマノミの稚魚に、なにかあつたのか!？）

繁殖班は苦労して、やっと最近、カクレクマノミの卵のふ化に成功するようになった。
ようやく少しずつ育ってきた稚魚たちに異変でもあつたらと、背筋が寒くなったのだ。

「あ、部長!」

古谷さんと原口さんはぼくを見ると、口々に言った。

「見てください！ たいへんなんです!」

「すごいことになってます!」

「なんだ!？」

ふたり 二人の指さす水槽すいそうをのぞきこんだ。

水槽すいそうの中には、妙なみようかたまりがあつた。

よく見ると、それは海藻かいそうでできた小さなクリスマスツリーだつた。そこにベルや星ほしやハートのかざりがうまくつつけてある。

「ね、すつごくかわいいでしょ！」

「めっちゃステキ！ 熱帯魚ねったいぎよとキラキラツリーが最高さいこうに映える！」

青い熱帯魚あお ねったいぎよたちが海藻ツリーの横よこをすいーつと泳およいでいる。たしかに、きれいで「映はえる」けどね……。

「……なんだ、こんなことで大声おおこえ上げたのか。びっくりしたよ。」

思おもわずつぶやくと、繁殖班班長の井上はんしゅうはん いのうえくんがぼそつとささやいた。

「部長ぶちやう。『こんなことで』なんて言いつたの、みおりたちに聞きこえたら、まずいですよ。」

「え、そ、そうか？」

「水みづの中なかにもツリーをかざるんだつて決めてから、みおりも麻央まおも、水槽すいそうの中なかに入いれても大丈夫だいじようぶな素材そざいとか、必死ひつしに工夫くふうして作つくつてましたからね。」

「ふ、ふうん。それで海藻のツリーなのか……。」

「よし、できた！ 見て！」

奥のほうからだれかが声を上げた。

首をのびして見ると、繁殖班のほかのメンバーが、小さな白いツリーを水槽をかこむよ

うにはりつけていた。

「わ、かわいい！」

「その水槽、クリスマスケーキみたい！」

女子二人がはしゃいで、そちらに向かつていった。

井上くんも、あわててそのあとを追いかける。

（繁殖班も、いろいろあったけど、みんな仲良くやつてるな。よかった……。）

にぎやかな一年生たちの笑い声を聞きながら、ぼくはしみじみと水族館の中を見回した。

生き物たちは元気だし、部員たちは楽しそう。

（こんな日が来るなんてな。本当によかった……。）



水族館部員は、だいたい三年の夏に部活のメイン活動から「引退」する。

そのために夏休み前には二年生の中から新部長、新副部長、各班の班長を決め、三年生からの役割を引きついで活動する。

ぼくは立候補して、この夏に部長に選ばれた。

多くの生き物の命をあずかるこの部で、しかも個性的な部員ぞろいで、さらにあのとき、状況で、部長になるのは覚悟が必要だった。

実際、たいへんな夏だった。いや、秋もたいへんだった。っていうかこの十二月に入ってからもたいへんだったかも……。

でも、こうやってみんなが楽しそうにしているのを見たら、部長になってよかったと思える。

（ぼくが水族館部に入部したときは、こんなふうになるなんて思ってもいなかったな……。）

去年の四月は、ぼくだって一年生だった。海や川の生き物が好きで、水族館部に入りたいくて、ワクワクしながら長浜高校に入学した。

そして、みんなと出会ったんだった——。

2

あこがれの水族館部

（今日^{きょう}からいよいよ、あの水族館^{すいぞくかん}部の部員^{ぶいん}なんだ！）

四月^{がつ}。ぼくはドキドキしながら、校舎^{こうしや}一階^{かい}のいちばん奥^{おく}にある理科実験室^{りかじっけんしつ}——水族館部^{すいぞくかんぶ}の部室^{ぶしつ}に向^むかった。

長浜高校^{ながはまこうこう}に入^い学^{がく}したら、水族館部^{すいぞくかんぶ}に入^{はい}ると決^きめていた。

ぼくはもともと、生き物^{いきもの}が好き^すだった。愛媛^{えひめ}の海^{うみ}や川^{かわ}のそばで育^{そだ}ったから、水^{みず}の中^{なか}にすむ生き物^{いきもの}は特に好き^すで興^{きょう}味^みがあつた。

中学二年^{ちゅうがくねん}のとき、長浜高校^{ながはまこうこう}には高校生^{こうこうせい}が運^{うん}営^{えい}している水族館^{すいぞくかん}があると知^しり、一^{いっ}般^{ぱん}公^{こう}開^{かい}日^びに見^みに行^いった。初^{はじ}めて長高水族館^{ながこうすいぞくかん}に足^{あし}を踏^ふみ入^いれたとき……衝^{しょう}撃^{げき}だった。

（なんて……きれいなんだ……）

澄すんだ水みずの中なかを泳およぐ色いろあざやかな魚さかなたちは、ゆるやかな流れ星ながぼしのようだった。

サンゴやイソギンチャクは、どこかよその星ほしに咲さく花はなのようだった。

いくら見みても見みあきなくて、ぐるぐるといろんな水槽すいそうを見みて回まわった。

気がきついたら終了しゅうりようの時間じかんになっていて、長高名物ながこうめいぶつのカメロンパンを買かってきてと、お母かあ

さんに言いわれていたのを思おもい出だしたのは、学校がっこうを出でたあとだった。

(絶対に、長浜ながはま高校水族館部こうこうすいぞくかんぶに入はいりたい！ あの水族館すいぞくかんに毎日まいにち通かよって、生き物いきものの世話せわをす

るんだ！)

そう決きめて、長浜高校ながはまこうこうに入にゅう学がくしたのだ。

そして今日きょう、その夢ゆめがかなう。今年度こんねんどの部活ぶかつスタートの日ひなのだ。

部室ぶしつにはもう二十人にんぐらいの生徒せいとが集あつまっていた。

仲なかのいい者もの同士どうしで盛り上あがったり、本ほんを読よんでいたり、ノートパソコンをいじったり、

みんな思おもい思おもいにすへぎしている。先輩せんぱいたちにいきなり話はなしかけることもできず、緊張きんちやうしな

がら、そーと部屋へやに入はいる。

(ここが水族館部すいぞくかんぶの部室ぶしつかあ……)

ぐるつと部屋を見回してみた。

壁には柵がならび、引き出しにはひとつひとつにきちんと『ピペット』『ミクロメーター』『試験管』などの、手書きのプレートがついている。実験の道具が種類ごとにしまつてあるのだ。

（おおー、顕微鏡が何台もあるぞ。）

ガラス戸柵の向こうにならんでいる、顕微鏡の列。本柵には、かつて先輩たちが書いた論文のファイルが一九九六年のものから年代順にならんでいるし、いろんな研究紀要や海洋生物に関する専門書の背表紙も見える。

（さすが、生き物の研究でも、すばらしい成果を出している長浜高校水族館部！ 研究の現場にいるって感じだなあ！ あ、あの窓際の水槽はなんだろう？）

ぼくは緑色ににごった水が張つてある、小ぶりの水槽に近づいた。蛍光灯が水槽を照らすようにセットしてあり、エアポンプ（水に酸素をとけこませる装置）がこぼこぼと空気を水の中に送りこんでいる。中をのぞきこんだ。

クロレラを育てているようだ。

「このクロレハは、なにかのえさにでもするのか……。」

つい口に出して言ってしまった。

「シオミズツボワムシのえさでしょ。」

だれかが、そう答えた。

「え？ シオミズツボワムシ？ プランクTONのワムシのこと？」

顔を上げたら、いつの間にか、ぼくのすぐ横に女の子がいて、いつしよに水槽をながめていた。

「そう。で、ワムシはカクレクマノミの赤ちゃんのえさにする。ここの部はカクレクマノミの繁殖をしてるんだから、そうに決まってるよ。」

きっぱり言い切ったその子の顔……ぐるんと大きな丸い目、おこったみたいにはね上がったまゆ……には見覚えがあった。たしか同じクラスの子だ。

「え、つとー、きみは……。」

「杉沢友香！ 井波くんも研究班希望？」

いきなり名前をよばれてびっくりした。

「なんでぼくのことを？」

「教室で重盛先生に入部届をわたすの見た。わたし、この部の研究班で研究したくて入部したんだけど、ああーっ！」

杉沢さんが、ぼくのうしろを指さしてさげんだ。

ふり返つて見ると、ショートカットがきりつとかつこい女子と、ふんわりとしたくせ毛がかわいい感じの女子の、二人の先輩が部室に入ってきた。

「中森先輩と星野先輩！ あのカクレクマノミの研究で、日本学生科学賞で最優秀賞の内閣総理大臣賞、さらに世界大会 I S E F で四位！ 世界で四位受賞の中森夏美さんと星野沙歩さんだよー！ キヤー！」

教えてもらわなくても、中森・星野さんのコンビのことなら、ぼくも知っている。というのは、テレビのニュース番組やドキュメンタリー番組に、何回も登場しているからだ。

この二人のコンビ『チーム・ニモ』が、日本学生科学賞で研究論文を認められ、日本一になっただけでもすごいのに、世界中の学生が集う科学のオリンピック I S E F (インターナショナル学生科学技術フェア) で動物科学部門優秀賞四等に選ばれたのは、愛媛県中が、い

や日本中が注目する大快挙だった。

「わたし、中森先輩や星野先輩みたいになりたくて！ 研究で世界に行くのが夢なんだ!!」

杉沢さんが顔を真っ赤にして、二人の先輩をうつとりと見つめている。よほどあこがれているんだな。

「井波くんは？」

「ぼくはその……まだそこまでは……。」

この部で、生き物と毎日いっしょにすごしたい、生き物のことをよく知りたいという気持ちはある。でも杉沢さんのようにはつきりと、なにをしたいかは決まっていない。

「あれ？」

杉沢さんが声を上げた。

見ると、中森さんが手招きして、だれかを部屋によび入れていた。

すると、おずおずと、ほっそりしたおとなしそうな女の子が部屋に現れた。一年生のようだ。

「……あの子……栄さんだ！」

「知^しつて^る子^こ？」

「日本^{にほん}学生^{がくせい}科学^{かがく}賞^{しょう}の中学生^{ちゅうがくせい}部門^{ぶもん}で去年^{きょねん}もおとしも受賞^{じゆしょう}した子^こで、たしか栄^{さかえ}夢^{ゆめ}莉^りさんって名^なまえ。やっぱりあの子^こも水族^{すいぞく}館^{かん}部^ぶに入^い部^ぶしたんだ！ わー、先輩^{せんぱい}たちと仲^{なか}良^よさそう！」

そう言^いつて、先輩^{せんぱい}たちと笑^え顔^がで話^{はな}している栄^{さかえ}さんを、うらやましそうに見^みつめた。

「いいなあ！ わたしも中^{なか}森^{もり}先輩^{せんぱい}や星^{ほし}野^の先輩^{せんぱい}とお話^{はな}したいー！」

杉^{すぎ}沢^{ざわ}さんが言^いい終^おわらないうちに、顧^こ問^{もん}の重^{しげ}盛^{もり}洋^{よう}二^に先生^{せんせい}が部^ぶ室^{しつ}に入^{はい}つてきた。

「おーい、ミーティングを始^{はじ}めるぞー！」

先生^{せんせい}が言^いうと、みんないつせいにやしやべりをやめ、席^{せき}についた。重^{しげ}盛^{もり}先生^{せんせい}は、ぼくのクラスの担^{たん}任^{にん}でもある。

海^{うみ}と川^{かわ}と生^いき物^{もの}への愛^{あい}がすごい熱^ね血^{けつ}先^{せん}生^{せい}で、ふだんはやさしく子^こどもを見^み守^{まも}るお父^{とう}さん（歳^{とし}もぼくのお父^{とう}さんぐらい）という感^{かん}じだけれど、おこるとサメみたいなこわい顔^{かお}になるのだ。

ぼくも急^{いそ}いでクロレラの水^{すい}槽^{そう}にいちばん近^{ちか}い席^{せき}にすわった。杉^{すぎ}沢^{ざわ}さんも、ぼくと同^{おな}じつくえにならんですわる。

部長である星野さんが黒板の前に立ち、よくとおる声で、

「起立！」

と言った。

全員で星野さんの号令に合わせ、起立、礼、着席をする。

「今年の新入部員、一年生は五人です。みんな、ようこそ水族館部へ！」

重盛先生が、笑顔で言った。

（五人か。ぼくと杉沢さんと、栄さんと、あと二人か。だれだろ？）

思わず部室を見回した。

すると、ぱちつと目が合った子がいた。髪の毛の長いちよつと大人っぽい女の子。ぼくと目が合うと、長いまつげをふせてすうつと目をそらした。

（……なんかきれいな子だなあ。あの子も一年生だったらちよつとうれしいかも……。）
ワクワクしたのも一瞬だった。

「えー、五人だけっすか？ 有名な水族館部だし、入部希望者、もつとたくさんいるのか
と思った！」

えんりよのない大声が、ぼくの前の席から部室にひびいた。みんながその声の主に注目する。

つんつんに立ったウニみたいな髪に、そでをまくり上げたシャツはくしやくしや、そしてでっかいその体！ 見覚えがあつた。

（こいつも新入部員なのかあ！）

やたら大声でろうかでさわいで、入学式で先生にしかられていたのを見た。クラスはちがうけど、とにかく声がよくひびくし、大きいからどこにいても目立つのだ。

「直人、あんた初日からよけいなこと言ひすぎ！」

ぼくの横にすわっていた杉沢さんが、身を乗り出して言つた。

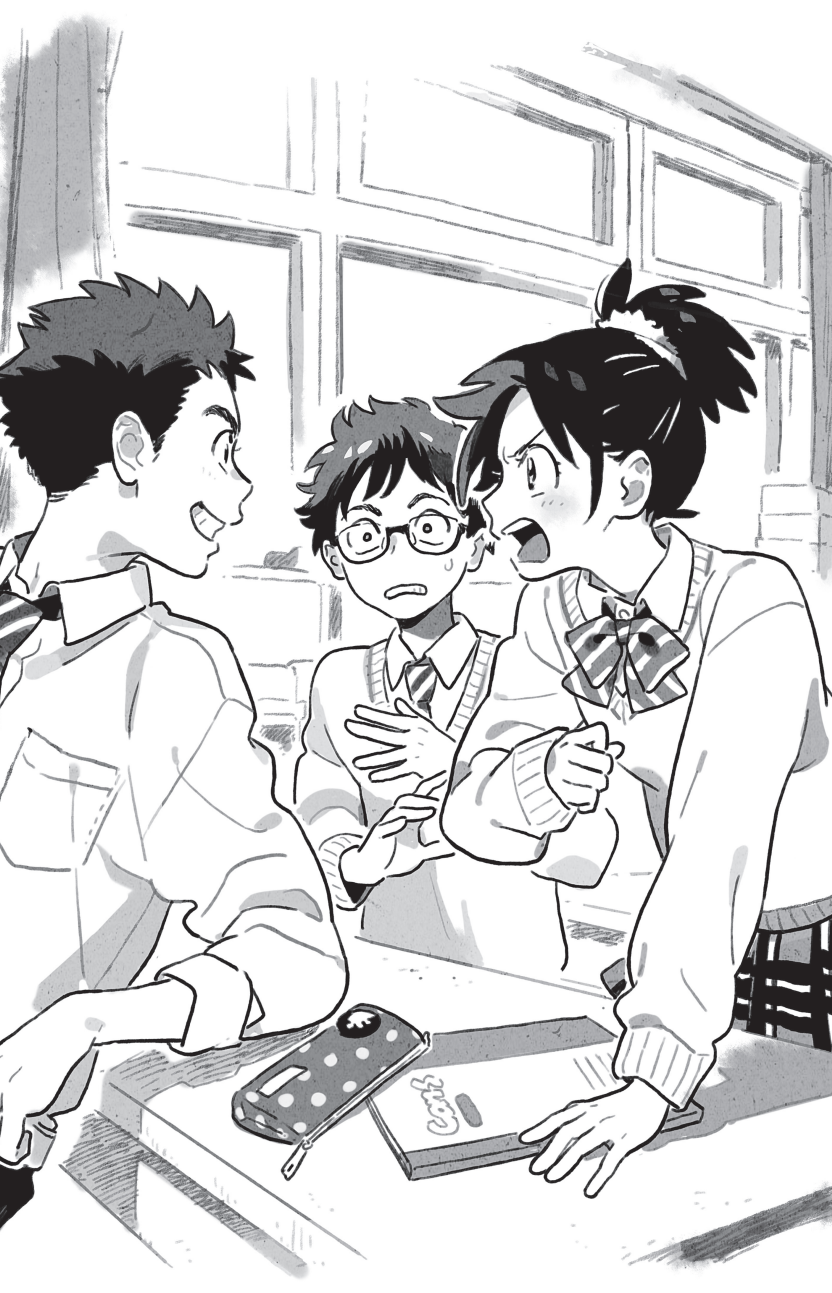
「出たな、おせっかい友香！ 友香のほうがるさい！」

直人とよばれたそいつがふり返り、顔をしかめて言い返した。

（えっ。この二人、知り合いなのか！）

「おせっかい!? 直人がつまらないことを言うから、注意しただけでしょう！」

「おまえのほうが、つまらないね！」



「もう一回言ってみ！」

二人が立ち上がり、にらみ合った。

「いいかげんにせんか！ 二人ともだまつてすわれ!!」

とうとう重盛先生がサメ顔に変身し、雷が落ちた。

むうつとした顔で、直人くんも杉沢さんも口を閉じる。

「それでは今から、部活を始める！ それぞれの班の仕事を各班の班長が説明するから、

新入部員はおとなしく、よく聞くように！ またさわいなら、網ですくつてドチザメのい

る中庭のプールにほうりこむけん！」

どつとみんなが笑った。直人くんも杉沢さんも爆笑している。

（自分たちのことなのに大ウケしてるよ……。）

部室を見回すと、栄さんはびっくりしたようにかたまっている。見るからにおとなしそ

うな子だから、大声を出されてこわかったのかもしれない。

一方、さつき目が合った美少女は無表情。クールに引いて見ている感じだ。

（なんかみんな、個性的っていうか、ちがすぎるなあ。こんな五人で、一年生同士、う

まくやつていけるんだらうか？)

ぼくは少し不安になつたが、すぐに思い直した。

(いや、でも、この部は班活動は先輩といつしよだし。一年生だけでいつしよになにかすることはないから、気にしないでいいか……。)

そして、その日の部活は終わつて、学校の最寄りの駅。

ぼくらは……一年生五人で、電車を待つていた。

先輩たちは部活の時間が終わつても、調べものをしたり、気になる水槽の手入れをしたり、それぞれ自分の仕事でみんないそがしそうで、だれも帰ろうとしない。

「今日は一年生は、もう帰つていいぞ。」

重盛先生に言われて、それぞれ学校を出たのだが……伊予長浜駅に止まる電車の本数は少ない。みんな同じ時間の電車に乗つて帰るから、どうしたつて駅で会つてしまう。

(五人だけつて、なにを話したらいいのかな……。)

ホームにならんで立つたまま、五人の沈黙は続いていく。

栄^{さかえ}さんはずーつとうつむいているし、相良^{さがら}紅佳^{べにか}さん——部室^{ぶしつ}で目^めが合^あったきれいな女^{おんな}の子^こ——も、無言^{むごん}。福森^{ふくもり}直人^{なおと}くんは大^{おお}あくびをしてるし、杉沢^{すぎさわ}さんは、なぜか空^{そら}を見上^{みあ}げてニヤニヤしている。

（くー！ キヤラがバラバラすぎて、だれにどう話^{はな}しかけていいかわからないんだけど！）
ベンチにすわって寝^ねたふりでもしようかと思^{おも}ったとき。

「ふわー、初日^{しよにち}だけど、部^ぶの仕事^{しごと}、けっこうたいへんだったなー！」

福森^{ふくもり}くんが唐突^{とうとつ}にでつかい声^{こえ}で言^いって、うーんとのびをした。

「えー？ 直人^{なおと}、水槽^{すいそう}のそうじとか生き物^{いのもの}の世話^{せわ}とか、ほとんど先輩^{せんぱい}にやつてもらってたじゃん！」

さっそく杉沢^{すぎさわ}さんがつつこむ。

（わ、また言^いい合^あいになったらこまる！）

「あ、あのさ。二人^{ふたり}はいつからの知^しり合^あいなの？」

わりこむように、たずねた。

「「保育^{ほいくえん}園^{えん}。」」

二人の声ふたりこえがそろった。

「え？ あ、じゃあ、おさななじみなんだ！」

「そうなんだよ。ずっといつしよに遊あそんでてさ、長高ながこうの一般公開日いっぱんこうかいびもいつしよに来きたんだよね。」

「おお！」

杉沢すぎさわさんと福森ふくもりくんが、笑顔えがおでうなずき合あった。

「なんだ……。おさななじみだったのか。それでそんな、言いいたいほうだい……。いや、なんでも思おもったことを言いい合あえる感かんじなんだね。」

「おれはね、この一般公開日いっぱんこうかいびがすつごく楽たのしかったから入部にゅうぶしたんだ。魚釣りゲームで遊あそんだり、タッチプールでナマコとかウニとかさわらせてもらったりさ！ ああいうみんなで楽しいことやろうぜ！ って感かんじ、大好だいすきなんだよな。」

福森ふくもりくんが目めをキラキラさせて、言いった。

「直人なおと、お祭り好まつずきだもんね！ 初めはじめっからイベント班はんに入はいるって言いってたの！」

「ふーん、そうなのか。」

イベント班の先輩は、「一般公開日でお客さんたちを喜ばせる企画をどんどん考えていく！それがイベント班の使命です！」って言っていた。福森さんのキャラにはぴったりかもしれない。

「栄さんはとーぜん、わたしと同じ、研究班だよな？」

杉沢さんが栄さんのほうをふり返ってたずねた。

「ええ、そのつもり。そのために一人で長浜に引越してきたんだもの。」

栄さんの言葉に、みんなびつくりした。

「え、一人で引越してきたの？」

「水族館部に入るために？」

福森さんと杉沢さんに聞かれて、栄さんは、こくんとうなずいた。

「中学生のとき……日本学生科学賞の授賞式で、中森先輩と星野先輩に出会って。お二人に、あなたの研究はすばらしい、ぜひ長浜高校水族館部でいっしょに研究をしましょう！って言われて。本当にうれしかった。でも、うちから長浜に通うのは遠くて難しくて……。それでこの近くの親戚のところに下宿させてもらうことにしたの。」

「すごいね！ 研究のために一人でやってきたんだ！」

「家族や地元（かぞくじもと）の友（とも）だちと離（はな）れるのは、勇（ゆう）気がいっただけ。でも、先輩（せんぱい）たちのすばらしい研究（けん）を引（ひ）きついで、もつと発（は）展（てん）させたいの。どうしてもよ。」

一見（いつけん）おとなしくて、気（き）が弱（よわ）そうに見（み）える栄（さか）えさんの強（つよ）い意（い）志（し）に、ぼくは圧（あつ）倒（とう）された。

（すごいな！ 夢（ゆめ）に向（む）かってまっしぐらなんだ！）

「相良（さがら）さんは？」

福森（ふくもり）くんが、だま（な）って話（はな）を聞（き）いている相良（さがら）さんにたずねた。

「わたしは、繁殖（はんしよく）班（はん）に入（はい）ろうと思（おも）ってるの。」

ついつと細（ほ）いあごを上げ（あ）げて、相良（さがら）さんと言（い）った。

「わたし、カクレクマノミが大好き（だいす）なんだ。だから繁殖（はんしよく）班（はん）の先輩（せんぱい）の話を聞（き）いたら、わたしもふ化（か）にチャレンジ（か）して、どんどんカクレクマノミを増（ふ）やしたいって思（おも）ったんだ！」

そう言（い）って、相良（さがら）さんはにこっと笑（わら）った。

（……うあ、笑（わら）うとめっちゃかわいい。）

ばちっ！

「いてっ！」

ふくもり
福森くんに頭をたたかれた。
あたま

「相良さん見てニヤニヤしてないで、井波くんもどこの班に入るか教えろよ！」

「二、ニヤニヤなんかしてないよ！」

「してたつて。」

福森ふくもりくんと杉沢すぎさわさんが、息いきぴつたりに言う。

「ぼ、ぼくも一般公開日で長高水族館に感動して。ここの生き物をじっくりと観察しながら世話をしたくて入ったんだ。だから……。」

だから繁殖班はんしゅくばんなんて、いいかもしれない……。そう答えようとした。いや、けして相良さがらさん目当てめあてじゃなく、本当ほんとうにそう思ったのだ。

「わ、そうなんだ！
じゃ研究^{けんきゅう}班^{はん}向^むきだね！
じつくり観^{かん}察^{さつ}したいなんて！」

杉沢さんが、ぐりつと大きな目を動かして、さげんだ。

「そうね。研究の基本は落ち着いた観察の姿勢よね。しんぼう強く、同じ条件下で起こる小さなちがいを見つけて、記録し、考察する。井波くん、落ち着いてる感じだし、研究に

向^むいてるかもしれない。」

栄^{さかえ}さんも深^{ふか}くうなずいた。

「じゃー、井波^{いなみ}くんは研究^{けんきゅう}班決定^{はんけつてい}だな！　いつしよに部活^{ぶかつ}、がんばろーぜ!!　友香^{ともか}や栄^{さかえ}さんもびつくりの発見^{はっけん}をしてさ、バーンッ！　と世界^{せかい}に羽^はばたいてくれよ。」

福森^{ふくもり}くんはぼくの肩^{かた}をばしつとたたいて、そう言^いった。

「いや、あの。」

「井波^{いなみ}くん、研究^{けんきゅう}班でもよろしくね！」

「よろしくお願^{ねが}いします！」

杉沢^{すぎさわ}さんと栄^{さかえ}さんにそう言^いわれ、ぼくは、あ、ええと……ともう少^{すこ}しよく考^{かんが}えてから

……と言^いおうとしたとき、電^{でん}車^{しゃ}が来^きてしまった。

そして……。

そのままぼくは、肱^{ひじ}川^{かわ}の流^{なが}れにそつてふき流^{なが}されていく白^{しろ}い霧^{きり}……愛媛^{えひめ}県^{けん}大洲^{おおす}市^し名物^{めいぶつ}『肱^{ひじ}川^{かわ}あらし』のよう^{おも}に思^きい切^きり流^{なが}されて、研究^{けんきゅう}班^{はん}に入^{はい}つてしまったのだった。

3

部活が始まった！

水族館部の活動が、本格的に始まった。

授業が終わったら、四時に部室に集合。十分ぐらいのミーティングがすんだら、それぞれ担当の生き物の世話にかかる。

先生が用意してくれているえさをやるのだが、えさは生き物によってちがう。

小型魚のえさはペットシヨップなどで売っている顆粒のもの、大型魚のえさは、冷凍したイカや小魚を解凍してぶつ切りにして、やる。

えさの準備にかかると、大型魚担当の者がいつせいにまな板でトントンとやり始めるので、部室は一気に調理場っぽくなる。

福森くんは、ドチザメ担当。ドチザメはサメの中では小型でおとなしく、人を襲ったり

はしない。イカやアジ、イワシ、サバなどの切り身を食べる。

福森くんはえさを切る包丁さばきがうまく、エプロンにタオルを頭にまいた姿で、「へい、らっしやい！ ご注文は？」などと言つて、みんなを笑わせていた。

ぼくは、スズメダイやイセエビのほか、ブラックオセラリスという魚の担当になった。

カクレクマノミは、アニメ映画『ファインディング・ニモ』の主人公にもなった、大人気のオレンジ色のかわいい魚だ。ブラックオセラリスはそのカクレクマノミの突然変異種で、真っ黒な色をしている。

ぼくはこの魚を、一目見たときから大好きになった。

全身黒で、ホワイトバンドとよばれる白いラインが、そこだけ白い絵の具で刷いたようにくつきりと顔やおなかの周りに浮かび上がっていて、カッコいい。

この子たちを見てみると、時間をわすれてしまう。

その日も、水槽に鼻の先がつきそうになるほど顔をよせて、魚を見つめていると。

「ブラックオセラリスって、稚魚のときはオレンジ色なのに、大きくなるにつれて黒くなつていくのがおもしろいよね。」

星野^{ほしの}さんが、声を^{こえ}かけてきた。

「あ、はい！　そう思います!!」

「どの水槽^{すいそう}の生き物^{もの}も好き^すきだけど、自分の^{じぶん}担当^{たんとう}の子^こは特^{とく}にかわいいよね。」

その言葉^{ことば}に、ぼくは大きくうなずいた。

「はい、稚魚^{ちぎよ}から育^{そだ}ててみたいです！　赤^{あか}ちゃんから育^{そだ}てた子^こは、かわいくてたまらないだろうなあ！」

にこにこことぼくの話^{はなし}を聞^きいていた星野^{ほしの}さんだったが、

「……そろそろ、水槽^{すいそう}のそうじをしないと五時^じになっちゃうよ。」

壁^{かべ}の時計^{とけい}を指^{ゆび}さした。五時^じからは班^{はん}ごとの活動^{かつどう}の時間^{じかん}になる。

「あ、は、はい！」

あわてて制服^{せいふく}のシャツを腕^{うで}まくりし、専用^{せんよう}スポンジをつかんだ。これで水槽^{すいそう}のガラスにコケがつかないように、みがくのだ。

（水^{みず}がちよっと減^へってきてる。今日は足^たしてやらないとな。全体^{ぜんたい}の水替^{みずか}えは来週^{らいしゅう}でいいかな……。）

水槽（すいそう）みがきや、水替（みずか）え以外にも、氣（き）にかけないといけないことはたくさんある。水温（すいおん）、エアポンプ（しょうめい）や照明（あか）の明るさなど、その生き物（もの）にちょうどいい環境（かんきよう）になっているか、毎日（まいにち）チェックする必要がある。

水質（すいしつ）の安定（あんてい）のために、ライブロック——死（し）んだサンゴの骨格（こつかく）が風化（ふうか）して、表面（ひょうめん）に微小（びじょう）な生物（せいぶつ）が繁殖（はんしよく）しているもので、『生きた岩（いいわ）』とも言（い）われている——を水（みず）の中に配置（はいち）してみた、その他（た）いろいろだ。

（いくらでも、することがあるなあ。生き物（もの）の世話（せわ）って、ここまでやったら完（かん）ぺきってことがないもんなあ。）

そんなことを考（かんが）えながら、スポンジを動（うご）かしていたら、

「井波（いなみ）くん！ 班活動（はんかつどう）、始（はじ）まるよ！」

杉沢（すぎさわ）さんが声（こえ）をかけてきた。

「うあ、ちよつと待（ま）って！ もう少（すこ）し！」

しまった、そうじをもつと早（はや）く始（はじ）めればよかった！

「先（さき）に行くね！」

栄さんといっしょに、杉沢さんは行ってしまった。

ちよっとおくられて部屋に行くと、

「わたしは、先輩方のあの研究を、さらに深く調べてみたいんです！」

杉沢さんが大きな声で研究班の班長である中森さんに言っているところだった。

あの研究とは、中森・星野さんコンビの共同研究「ハタゴイソギンチャク刺胞射出の秘密」のことだ。

もともとこの水族館部の研究班の先輩たちは、「なぜカクレクマノミだけが、イソギンチャクに近寄っても毒針（刺胞）で刺されないのか？」を疑問に思い、研究を進めていた。そして「カクレクマノミの体をおおう粘液の成分の中に、その理由がある！」というところまではわかった。しかし、どの成分がかかわっているのかまではわからないままに卒業していったしまった。

その研究のボタンを、中森・星野さんコンビが引きついだ。

そして実験をくり返し、カクレクマノミの体表粘液にふくまれる高い濃度のマグネシウムイオンが、イソギンチャクに刺されるのをふせいでいることを発見した。

「中森先輩と星野先輩は、実験に使ったハタゴイソギンチャクの触手に、NMDA型グルタミン酸受容体があること。そしてマグネシウムイオン濃度が下がると、その受容体が影響して毒針を出すことまでつきとめましたよね！」

杉沢さんが興奮をおさえられない様子で、話し続けた。

「論文を何回も読んだんですけど、『NMDA型グルタミン酸受容体が、刺胞射出をコントロールしているとしたら、条件によって毒針を出す、出さないということを、脳のないイソギンチャクが原始的な記憶・学習をしているかも。』っていう考察がすごいですね！ワクワクしちゃいました！」

「NMDA型グルタミン酸受容体は、記憶や学習に深く関係するものだし、今後その学習メカニズムを発見できるかもしれないって思ったのよね。」

中森さんがうなずく。

「そのNMDA型グルタミン酸受容体が、イソギンチャクと同じ刺胞動物のクラゲにもあるとしたら。そのときはマグネシウムを使って、クラゲに刺されない安全な予防クリームを開発できるかもしれないっていう、展望にも感動しました！」

「記憶きおく学習がくしゅうのほうの研究けんきゅうも進すすめたいけど、クラゲ予防よぼうクリームのほうも、進すすめていきたいところなんだけどね。卒業そつぎょうまでにそこまで進すすめられるかどうか……。」

ふたり はやくち
二人の早口はやくちの会話かいわを聞きながら、つーつと冷や汗あせが出てきた。

（会話かいわが専門せんもん的てきすぎてなにを言いってるのか、よくわからないんだけど……。）

でもこれこそが、『世界せかいで四位い！』の研究論文けんきゅうろんぶんなのだ。きつと、未来みらいにつながるすばらしい研究けんきゅうなのだということは、わかる。

「わたしは、カクレクマノミの体からだをおおっているマグネシウムイオンについて、もつとくわしく調べたいと思おもってるんです！ マグネシウムイオンが体表たいひょうでどうして高たかい濃のう度どで保たもたれているのかは、まだわかってないですよね？」

すぎさわ
杉沢すぎさわさんがつくえに大おおきく身みを乗のり出だして、さらに熱あつく語かたった。

かんが
「考かんがえたんですけど、粘液ねんえきの中なかのタンパク質しつが、海水かいすいの中なかのマグネシウムイオンを引ひきよせてるんじゃないかと思おもうんです。」

「なるほど、マグネシウムイオンとタンパク質しつの関かん係けいを調しらべたいのね。いいんじゃない？」
そう言いって中森なかもりさんがうなずいた。

「わたしも、先輩方の研究をさらに進めたいと思っています。」

じつと二人の会話を聞いていた栄さんが、話し出した。

「刺胞動物に前から興味があつて、クラゲの研究をしたいんです。クラゲを使って、毒針を出す仕組みをもっとくわしく調べてみたくて……。」

「ああ、それもいいね。クラゲはまだ解明されていないことが多いから、おもしろいよね。」

「そうですよね!」

「うん、おもしろいと思う!」

中森さんと栄さん、杉沢さんが三人で楽しそうに話しているのを聞いて、ますますぼくは不安になってきた。

(杉沢さんも栄さんもすごいな。ふだんから、たくさん勉強してるし、考えてるんだ。)

それにくらべぼくは、「繁殖もいいけど、研究もかっこいいし、いいかな。」ぐらいのノリだし、目標にしている研究テーマもない。専門的なことも、わからない。杉沢さんと栄さんに勧められて、流されるように研究室に入ったものの……。

(こんなぼくが研究室に入るのは、やはりまちがいだったかも。)

「で、井波くんは？」

中森さんにたずねられて、あせった。

「ぼ、ぼくはその、じっくり生き物の世話や観察ができれば、なんでもいいかな……なんて……」

だんだん声が小さくなるのが、われながら情けない。

「それなら、二年生のクラゲの共同研究に加わったらどうかな？　いろいろ教えてもらいながらやればいいよ。」

「は、はい！」

結局ぼくは、二年生の先輩といっしょに、クラゲの光に対する反応についての研究をする事になった。

毎日が流れる川のように、さらさらと過ぎていった。

生き物の世話、水槽のメンテナンス、それに研究のための勉強。クラゲについて先輩が書いた過去の論文を読んだり、資料をさがしたり。月に一度の一般公開日もあるし、

日々の授業に宿題にテストに学校行事だつてある。

夢になつて、目の前のことに取り組んでゐるうちに、夏になった。

七月の第三土曜日。

その日の一般公開日はお天気もよくて、いつにも増して大盛況だった。

イベント班が作った、でっかいカクレクマノミとナンヨウハギのはりぼてが、子どもたちに大好評。みんないつしよに写真を撮っている。

ぼくは水槽の前で、お客さんに生き物の説明をしたり、小さい子といつしよに魚にえさをあげたりしていた。

「きみ、だんだん説明が、上手になつてきたね。」

声をかけてきたのは、石原智樹さん。長浜高校の卒業生で、初代の水族館部の部長だ。毎月のように小さい娘さんを連れて、一般公開日にやつてきてくれる。

「え、そうですか？」

ほめられると、やつぱりうれしい。研究班では杉沢さんや栄さんという、やる気あふれる優秀な二人に差をつけられている。先輩に言われたことをまちがえないようにやるだけ

でせいっぱいだ。

福森くんは、イベント班で積極的（せつぎよくてき）にいろんなアイデアを出（だ）している。来月からは福森くんの提案（ていあん）で、生き物の説明（せつめい）を、紙（か）に書いたものだけでなくデジタルフォトフレームに画像（がぞう）を入れて、展示（てんじ）することになった。

相良（さがら）さんも繁殖班（はんしよくはん）の活動（かつどう）が充実（じゅうじつ）しているみたいで、いつ見てもいそがしそうだし、とても楽し（たの）そうだ。

「一年生（ねんせい）では、ぼくだけ地味（じみ）っていうか、あんまり活躍（かつやく）していない感じ（かん）なんで、そう言（い）ってもらったら、うれしいです……。」

すると石原（いしはら）さんは、ほえつとへんな声（こえ）を上げた。

「今（いま）、この水族館部（すいぞくかんぶ）って、そんなに全員（ぜんいん）ががんばって活躍（かつやく）しないといけない空気（くうき）なのかい？」

「え、活躍（かつやく）しないといけないってことはないんですけど、みんなすごくやる気（き）があつて、研究（けんきゅう）の目標（もくひょう）も高いところにあるし。いろいろ教（おし）えてくれている三年生（ねんせい）の先輩（せんぱい）たちも、もう部活（ぶかつ）は引退（いんたい）だし、ぼくだけこんな感じ（かん）でいいのかなって……。」

つい、ぐちつぽくなくなってしまった。石原さんは首をかしげ、少しの間にか考えてから話し始めた。

「あのね、一九九五年にぼくらが水族館部を始めたとき……そのときは自然科学部って名前だったけど……部屋に水槽二個だけで。研究も、重盛先生に言われて、『せっかく自然科学部っていう部を作ったんだから、自然を観察しよう。川でも見に行くかー。』あれー、先生、同じ貝がいつぱいいまーす。』ほー、そうか。なんの貝か図鑑で見ようかー。』みたいな感じで、ゆるゆるだったよ。」

「ええ？　そ、そんなのんびりした感じだったんですか？」

「ああ。そのころは学校に海水井戸もないし、暑いや寒いやさわぎながら、ポリタンクをかかえて裏の海岸に海水をくみに行ったりね。とりあえずイシマキガイを研究しようかって言ってたくさん集めたら、よく似たちがう貝で集め直しになったり。たいへんだったけど、毎日楽しかったなあ。」

石原さんはなつかしそうに、目を細めた。

「へええ……。」

「そんな部が、ちよつとずつ生き物を増やして、こんなにりっぱな水族館まで作つて、最近ではすごい賞をとつてき。うれしいし、感心してるし、誇りにも思つてるよ。でも、この部のいちばんいいところはさ、毎日生き物と楽しくすごせるつてところだと思う。それができたら、いいんじゃない？」

そこまで石原さんが言つたとき、

「パパ！ 早く！ ハリセンボンのところに行こうよー！」

娘さんがかけよつてきて、石原さんの腰にだきついた。

石原さんは、ぽん、とぼくの肩をたたいてから、娘さんの手をにぎった。

（そうか、そうだよな。生き物と楽しくすごしたくて、この部に入ったんだもん。すごい結果を出さないといけないなんて、だれが決めたわけじゃないんだもん……。）

石原さん親子が行くの見送つたら、肩の位置が下がった気がした。

すると、ちよつと離れたところから、じーつとこちらを見ている男の子が目に入った。

その子の目線の先を追うと……長高水族館の名物魚、ウツボのウーボくん。

（あの子、どうしたんだろ？ ウツボが見たいのかな？）

それで、その子この前まえに行き、体を低ひくくして話はなしかけた。

「ウツボ、近ちかくで見てみる？」

すると、その子こはあどずさりした。

「見みたい……けど、こわいし。」

ウツボはヘビのように長ながい。肉食にくしよで、魚さかなやタコやエビなんかをギザギザの歯はのなんだ大きな口くちで、がぶつとつかまえる。すぐどうもうな生いき物もののように見みえるが、じつはおくびようで、こちらから攻こう撃げきしないかぎりかみついてきたりしない。

「ふうん、ちよつとこわいかな？ でも、よく見みたら、かわいい顔かおをしてるんだよ。」

「……ほんと？」

男おとこの子こは、おずおずとよつてきた。

「この子こ、ウーボくんっていうんだよ。こつちのほうがよく見みえる。」

その子こといっしょに、水槽すいそうの中なかで泳およいでいる砂色すないろのウーボくんをじっくりながめた。うん、イケメンとはいえないけれど、味あじわいがある個性こせいのない顔かおだよ。シン・ゴジラの第だい一形けい態たいに似にてるかも。



「……ほんとだ！　なんか、かわいい！」

男おとこの子こが笑わらった。ぼくもいつしよに笑わらった。

（やっぱり、こういうの、好きすだな。）

担当たんとうの生き物ものの世話せわをするのも好きすだけど、世話せわしている生き物ものをお客きやくさんに見みて喜よろこん

でもらえるのは、本当ほんとうに楽しい。

この部ぶに入はいってよかった！　と思おもう瞬間しゆんかんだ。

（ぼくはぼくのペースで、いいんだよ……な。）

ウーボくんに夢中むちゆうの男おとこの子こを見みながら、そう思おもった。